



薄暮

下手の横好きの最たるものに夫のゴルフがある。夫がゴルフを始めたのは、同僚達よりずっと遅れて四十才、昭和四十六年の夏のことであった。若くして父となり、当時すでに四児の父であったから、日々の生活で精一杯で、とてもゴルフどころではなかった。

しかし高度成長も絶頂期とあって、課長ともなれば、会社のつき合いい上からも、ゴルフは必要条件とされる時代となった。友人の知り合いの店で道具を一揃い購って、宝物のように玄関に置いた。その後

上達があまりはかばかしくなかったのは、練習のための資金が乏しかったからだと思っていた。

やがて鹿児島支社長となり、単身赴任することになった。支社としてゴルフ場の会員登録を三つ四つ持っていたはずだから、その気になって励めばいい線まで行けたと思うのだが、残念ながら変化が見られなかったのは、ゴルフよりも目のないお酒の引力に負けて、夜な夜な天文館に足が向いていたからだと思っ。

東京に戻って教室に通ったり、ビデオレッスンも受けた筈なのだが、よく戴くのはブービー賞だっただと思っ。それでも結構楽しいらしく、退職金の一部で郷里の incoming の家近くにオープンしたゴルフ場の会員登録を買つと云つ。

「田舎に帰ったら、ゴルフくらいしかやることは

ないから、お前もやりなさい。」

というので、私も會員となった。とはいっても私にプレーする機会などある筈もなく、レッスンプロに付いたこともあつたが、私は動かしているつもりはないのに「首が動く」と云われて納得できないまま足が遠のいていた。そして昨年夫より一足先に入来に帰ることとなつて、それからはクラブを握ることもなく過ぎていった。

この夏、子会社の社長も定年となり、入来に戻つて来た夫のもとへ遊びに来ていた若い人達が「薄暮」といつ一般のプレーのあとで回れる格安のコースがあると言つた。結局その若い一人とそのコースに出ることとなった。

私の道具は、サンフランシスコで買ってきた安物ではあるが、一通りは揃っている。しかし夏物の襟

付きのシャツなどは持っていない。夫の縮んでしまったポロシャツを買つてキュロットスカートをはいていざ出陣である。

四時スタートといつても鹿児島の日暮れは遅い。カートにバッグを載せて、ゴロゴロと引きながら、私一人がレディースのティーグラウンドに向かう。夏の緑濃く繁つた丸山目指してエイツとはかりに第一打を振つた。

云つまでもなく大して飛ばない。左にゴロが八十ヤードほど飛んだだけだったが、玉が見えるところにあつてほつとした。パー4を四打目くらいでグリーンに乗せた。そのグリーンがまた感じが掴めず、あつちに行つたりこつちに行つたりで、夫に

「真面目にやりなさい。」

と言われる始末。ヘッドカバーを落として来たり、

ティーは無くしたりで、九ホールが何と長かったこと。結果は、私のスコアは論外だが、私の参加でメチャメチャになった夫に、我にもなく同情してしまふこととなった。

夕茜を背に黒々と浮きでた丸山に向かって深呼吸をした。こんな弥次喜多ゴルフも結構楽しいものだ。そして今まで毎日忙しく脇目もふらずに過ごしてきた私に、「ご褒美のような楽しい老後が待っているよ」にさえ思えてきたのだった。

平成七年八月